シェイクスピアのセカンド・フォリオに見られる プレス・ヴァリアント

住　本　規　子

概要

本稿は科研費共同研究（基盤研究 ©（一般））「シェイクスピア戯曲の二つ折り本（第1版から第4版まで）の研究」（研究代表者：桑山智成京都大学大学院准教授、研究分担者：廣田篤彦京都大学大学院教授、長瀬真理子九州工業大学准教授、住本規子明星大学 (現名誉) 教授、課題番号 18K00370、平成 30年度～令和 2年度（令和 3年度現在コロナ禍で延長中）において住本が行った研究の成果の一部として、セカンド・フォリオの *Julius Caesar* のヘッド・タイトルに現れる loose type、この場合は合字（ligature）Æ、の位置の揺れを取り上げ、これまでに判明したところを報告するものである。

はじめに――本研究の経緯

筆者は研究代表者としてシェイクスピア・フォリオに残された読者の書き込みの研究を行ってきたが、2013年と 2016年に、廣田篤彦京都大学大学院教授と J-C. Mayer CNRS 教授を研究協力者に迎え明星大学で国際シンポジウムを主催した。2016年はシェイクスピア没後 400年の記念の年でもあり、慶応大学で開催された日本シェイクスピア学会でセカンド・フォリオをテーマとしたセミナーも合わせてリーダーとして開催したのであったが、その時のセミナーメンバーと明星大学所蔵のフォリオを契機とする科研費共同研究を立ち上げることになった。

打ち合わせを兼ねた研究会を、明星大学資料図書館貴重書室で、メンバー全員 4名がともにセカンド・フォリオを中心に数冊のフォリオを見比べながらブレインストームを行う形で開催したのだが、そこでほとんど偶然セカンド・フォリオのプレス・ヴァリアント（同一版内のテクストの異同）を見つけたのが本研究の発端である。メンバーのひとり長瀬真理子九州工科大学准教授が学会セミナーで行ったセカンド・フォリオの編集方針についての研究発表のなかで、セカンド・フォリオではファースト・フォリオにあるファン

ファーレの類を指示するト書きが消去される傾向が観察されると指摘しておられた。そのことも念頭にファーストとセカンドどちらも複数冊並べて協働して比較検討していたなかで、消去作業がエラーを発生させ、ストップ・プレス・コレクション（印刷を止めて行った修正[1]）が行われた結果、プレス・ヴァリアントが発生している箇所を Sig. t2, column a（*Richard III*　3幕1場画像1，2参照）のなかに発見した。その後 *Richard III* を中心としてほかにもプレス・ヴァリアントがないかを筆者が単独で明星大学所蔵の26冊のセカンド・フォリオを（毎回数冊を並べて）調査するなかで、今度は偶然、Sig. ll5にある *Julius Caesar* のタイトルに用いられている合字 Æ の位置がコピーによって異なることに気付くに至った。エヴィデンスは以上の2点にとどまるものの、これらはセカンド・フォリオの各コピーにどのように分布、出現するのだろうか、合字の位置はどれが理想のものだったのだろうか。こうした疑問がどこまで解明できるか明星大学図書館が所蔵するセカンド・フォリオ全26冊について検証してみたいと発想したのが本研究の経緯である。[2]

プレス・ヴァリアント（異同）

プレス・ヴァリアントは古版本を編纂し、その版本がもともと意図していたテクストにできるだけ近いテクストを再現しようとする際、必ず確認しなければならないデータである。古版本をもとに行われる現代版テクストの編纂作業においても重要なデータであり、プレス・ヴァリアントの調査は欠かせない。そもそも、プレス・ヴァリアントはストップ・プレス・コレクション（印刷を止めて行った修正）という初期近代の印刷工房独特の印刷工程の

1　本稿における専門用語の日本語訳は Blayney 訳での五十嵐を参考にした。

2　上述のなかで複数冊を同時に並べての閲覧調査という事実を強調したのは、今回のような発見のチャンスはこのような形の閲覧調査が可能であって初めて実現することを確認するためである。フォリオの調査ができる欧米の図書館では、一度に閲覧できるのは、その都度1冊のコピーだけであるから、フォリオの複数コピーを同時に閲覧することを可能にしてくれる明星大学図書館の貴重書室は、山田昭廣教授も別の観点から指摘する通り（山田 2019　45頁）、研究者にとって実に貴重な場所なのである。また、我々が行ったようにグループが打ち合わせの会話をしながら閲覧できたのもこの場所のもたらした稀有な恩恵で、英国 DMU の Gabriel Egan 教授は 2015年1月に学生を率いて来学し、“Text Technologies” という科目の授業をフォリオを使って実施していたが、世界のほかの図書館ではできないということが来学の理由だと聞いた。DMU のこの授業の来学はその後別の担当教員が引率して続いた。

結果生じる同一版（エディション）内のテクスト（スペリングやパンクチュエーション、活字の向きや位置、ト書き、ページ番号などを含む）の異同を指す用語である。本刷りに入る前の校正作業がいかに綿密に注意深く行われたかはいつの時代も変わらない。それでも残る要訂正箇所や刷り作業上起こり得る活字の抜け落ちやゆるみなどは、発見の都度修正が施されたであろう。刷り工程のどの時点であれ、校正が入ったのであれば、校正前の印刷分は破棄して校正後の印刷分だけを完成本に使用するのが現代の考え方であるが、当時、紙が業者の投資の多くの部分を占める貴重な資材であったためであろうが、[3]刷った分の用紙は、校正前のものであれ校正後のものであれ、すべて製品としての書物に使用されたため、「プレス・ヴァリアント」が残されたというわけである。校正指示の入ったシートが完成した本に紛れ込んでいる例すらもめずらしいことではないという。シェイクスピアのファースト・フォリオにもそうした例があることはよく知られている。[4]

17世紀初頭の印刷工房の仕事の詳細を記録した資料は残念ながら残っていない。しかし、自身印刷業者でもあり、王立学会会員に選出された（1678-1682）Joseph Moxon（1627-1691）が17世紀後半のそれを、*Mechanick Exercises: Or, the Doctrine of Handy=Works. Applied to the Art of Printing.* The Second Volumne（1683）として自ら出版した。印刷工房の作業を、活字制作から、親方、植字工や印刷工、それに校正者といった職種別に手順から道具まで事細かに記述して、彼自身が「こうした内容を扱う最初の（と思われる）」（Sig. A2v）と自負する書物に残した。現在は、オンライン・データベー

3　以下で触れることになる Moxon は、校正作業の解説の最後で、校正者（Corrector）の仕事がいかにスキルと注意力を必要としたか、また、校正者自身そうならざるを得なかったかを次のように述べている。“Thus you see it behoves [the corrector] to be very careful as well as skilful; and indeed it is his own interest to be both: For if by his neglect an Heap be spoiled, he is obliged to make Reparation.” (Moxon Nn2v　強調筆者) 校正ミスのために刷り上がったヒープが使い物にならないようなことになると代償を負担しなければならない校正者は、仕事の精度を維持すべく細心の注意を払うことこそ己の利にかなうことなのだ、と述べるこのくだりは、やはり出版部数に合わせたヒープを反故にする代償、すなわち、一山分のヒープの紙代弁償費用が無視できないほどのものだったことを物語っていよう。

4　ピーター・W・M・ブレイニー著、五十嵐博久監訳『シェイクスピアのファースト・フォリオ―偶像となった書物の誕生と遍歴』（水声社、2020）、68-77参照。現在入手が難しいブレイニーの原書にある修正指示の入ったフォリオのページ画像をみることができる。

ス *EEBO* にて手軽に読むことができるこの書物[5]が、17世紀前半についても状況はほぼ変わらなかったであろうという前提で、印刷業研究の拠り所として読み直しが行われている状況である。Joseph A. Dane の "Perfect Order and Perfected Order: The Evidence from Press-Variants of Early Seventeenth-Century Quartos"（*PBSA* 90:3, 1996, 272-320） や、Gabriel Egan の "The Editorial Problem of Press Variants: Q2 *Hamlet* as a Test Case"（*PBSA* 106:3, 2012, 311-55）はこの読み直しを反映した優れた論考の例である。

プレス・ヴァリアントという言葉自体は Moxon の *Mechanick Exercises* には出てこない（修正前も廃棄することなく書物へと組み込んだ彼らにヴァリアントという意識はなかったことをもの語る）のだが、印刷工が親方のところから印刷部数に必要な一定枚数の用紙からなる一山「ヒープ（heap）」（以下ヒープ）を受け取ってくるところから、水通しをして一晩寝かせたそのヒープの上から順に表の刷りをおこなっては一枚ずつ刷り終わった紙を印刷面を上にして重ねていき、全て刷り終わると、ヒープをそっくり裏返し、反対側の刷りを同様に作業し（パーフェクティング）、かくて両面が印刷されたヒープになると、室内の竿に順序良く干して乾燥、最後に取り込んでふたたびヒープにし、本に組む作業に備えて保管場所に並べるところまで、作業の手順と様子が注意点などとともに詳細に語られている。Moxon の記述からわかることは、ヒープのアイデンティティ、すなわちヒープを構成する紙一枚一枚の順番、はこれら一連の作業を通してほぼ変わらず維持されたであろうということである。Dane や Egan の論文はこの点の認識を踏まえた上での優れた議論を展開している。

通常初版本のプレス・ヴァリアントは比較的よくデータ収集が行われている。プレス・ヴァリアントの調査は同一版の全コピー（現存するコピーに限られてしまうわけだが）相互の校合という決して容易ではない地道な作業で行われる。[6]シェイクスピア・フォリオの場合も、現代テクスト編纂に欠か

5 この書物の現代版としては、Herbert Davis & Harry Carter 編があり、序文で Moxon および本書の背景についての情報を得ることが可能である。

6 たとえば、シェイクスピアとフレッチャー（John Fletcher, 1579–1625）による合作品 *Two Noble Kinsmen*（1634）は明星大学図書館にも 5冊（うち 1冊は部分のみ）収蔵されているが、Malone Society Reprint 版（2005）の出版に際してはそれらのコピーすべてが調査対象となった。

せないファースト・フォリオについては、大掛かりな校合機械を考案し研究した Charlton Hinman（1963）により明らかにされて以来プレス・ヴァリアントのデータ収集はかなり進んできた。Eric Rasmussen は、ファースト・フォリオのプレス・ヴァリアントを 338 件リストアップしている。そのほとんどは Hinman により発見されたものだが、Rasmussen は 8 件の発見を新たにリストに加えている。（Rasmussen and West 875-882）

Hamlet の部分（Sig.nn5v~Sig.pp5v）からファースト・フォリオにおけるプレス・ヴァリアントの例をスラッシュの前が訂正前、後が訂正後の（と考えられている）テクストを示すかたちで 5 例紹介しておこう。*Hamlee / Hamlet*（Sig. oo2v）, take you / thanke you（Sig. oo2v）, returnes. Puzels / returnes, Puzels（Sig. oo5）, rights / rites（Sig. pp5v）, Crocadile / Crocodile（Sig. pp5v）（いずれも、Rasmussen & West, 879 より）。これらのサンプルでは、異同のどちらを訂正前、どちらを訂正後とするかという判断は容易につきそうに見えるが、すべてのサンプルを俯瞰してシートごとの印刷順を論理的に推し量った上でなければ確定的な判断はつかない。逆に、印刷順の推定に到達できれば、ヴァリアントのどちらを版本が、さらには著者が、意図した読みなのか、Egan の主張のとおり、より確信をもって判断することができるのである。（Egan 355）

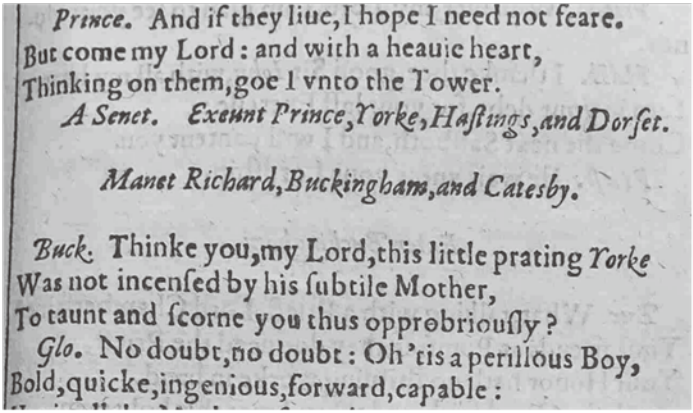
ト書き *'Manent'* の位置に見られるプレス・ヴァリアント

すでにかなり精緻な調査が行われてきたファースト・フォリオと異なり、セカンド以降のフォリオのプレス・ヴァリアントの調査は、筆者の知るかぎりまだ行われていない。本稿では、上述のとおり、2つのサンプルについて検証する。まず、セカンド・フォリオの Sig. t2, column a（*Richard III*　3 幕 1 場）のト書き中の '*Manent*' の位置についてみていこう。この場面はエドワード四世崩御の直後、幼い王子 2 人（皇太子とヨーク公）が父王の後継者として即位に臨むために叔父のグロスター公（のちのリチャード三世）に呼び出され、ロンドン塔へといざなわれるところ、不安がる皇太子たちが退場するとグロスター公リチャードが部下のバッキンガムとケイツビーとともに舞台上に残り、皇太子ではなくリチャードを王位につかせる陰謀を開始すべ

く画策する場面である。

セカンド・フォリオの編者が底本にしたファースト・フォリオでは、画像1にあるように、皇太子らが退場する合図にトランペット（またはコルネット）によるファンファーレ（‘*A Senet.*’）を配置している。エリザベス朝の舞台では、国王や相当する人物の公的な入退場の合図としてファンファーレを鳴らすことが習慣となっていたので、このト書きは読者に舞台上演を彷彿とさせるものだったはずだ。セカンド・フォリオは基本的にはファースト・フォリオのページごとのコピーテクストであるが、長瀬の考えでは、こうした鳴り物指示を減らす努力をしたようだ。長瀬の指摘によれば、セカンド・フォリオの編者には、芝居本を舞台観劇とは離して古典作品のようにあくまで読書のための格調高い読みものにヴァージョンアップする意図があったと考えられるという。この場面のト書きからも、‘*A Senet*’を削除する指示がセカンド・フォリオの印刷所原本につかわれたファースト・フォリオに書き込まれたに違いなかろう。（Nagase 44-48）ところが、なんらかの理由でその指示の書き込みが‘*Manet*’を‘*A Senet*’のスペースに移動させよという指示に植字工には見えてしまったのだろう。その結果、画像2にあるようなト書きのエラーが起きてしまったと考えられる。このエラーはセカンド・フォリオの本刷り（print run）に入る前の校正では見落とされてしまったのだろう。本刷りに入ってしばらくしてから気付いた印刷工がストップ・プレス・コレクションを実施し、画像3のように修正したのである。明星大学図書館所蔵本で見るかぎりでも、修正後を示すコピーの方が17対9と圧倒的に多くなってはいるが、修正前のものも無視できない数に上っている。

画像 1　ファースト・フォリオ の *Richard III*　3幕 1場 148-55行 [7]

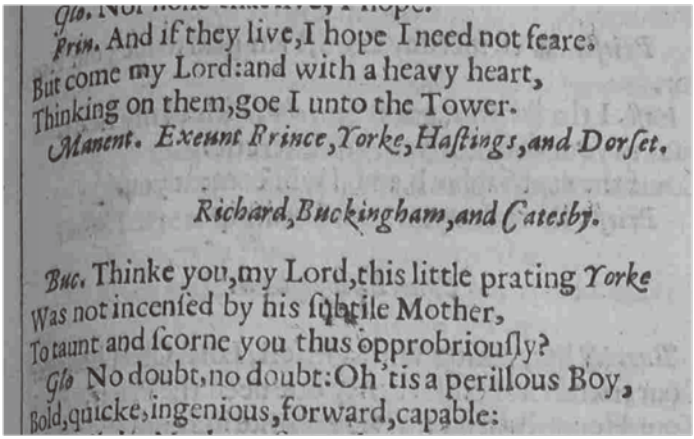

Prince. And if they liue, I hope I need not feare.
But come my Lord: and with a heauie heart,
Thinking on them, goe I vnto the Tower.
A Senet. Exeunt Prince, Yorke, Haſtings, and Dorſet.

Manet Richard, Buckingham, and Catesby.

Buck. Thinke you, my Lord, this little prating *Yorke*
Was not incenſed by his ſubtile Mother,
To taunt and ſcorne you thus opprobrioufly?
Glo. No doubt, no doubt: Oh 'tis a perillous Boy,
Bold, quicke, ingenious, forward, capable:

Mr. William Shakespeares Comedies, Histories, & Tragedies. (London, 1623), sig. r6
（明星大学図書館所蔵，F1-6, MR 1935　撮影筆者）

画像 2　セカンド・フォリオ の Richard III　3幕 1場 148-55行（修正前サンプル）


Prin. And if they live, I hope I need not feare.
But come my Lord: and with a heavy heart,
Thinking on them, goe I unto the Tower.
Manent. Exeunt Prince, Yorke, Haſtings, and Dorſet.

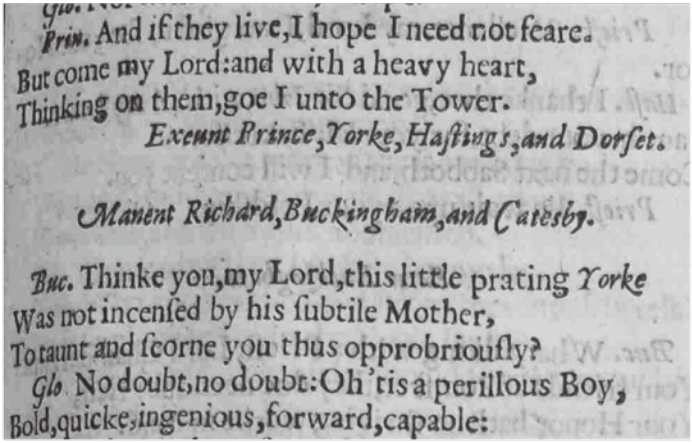
Richard, Buckingham, and Catesby.

Buc. Thinke you, my Lord, this little prating *Yorke*
Was not incenſed by his ſubtile Mother,
To taunt and ſcorne you thus opprobrioufly?
Glo No doubt, no doubt: Oh 'tis a perillous Boy,
Bold, quicke, ingenious, forward, capable:

Mr. William Shakespeares Comedies, Histories, & Tragedies. (London, 1632), sig. t2
（明星大学図書館所蔵，F2-3，MR 0668　撮影筆者）

7　幕場行表示は James R. Siemon 編 Arden 3版に依拠。

画像 3 セカンド・フォリオ の *Richard III*　3 幕 1 場 148-55 行（修正後サンプル）


Prin. And if they live, I hope I need not feare.
But come my Lord: and with a heavy heart,
Thinking on them, goe I unto the Tower.
Exeunt Prince, Yorke, Hastings, and Dorset.

Manent Richard, Buckingham, and Catesby.

Buc. Thinke you, my Lord, this little prating *Yorke*
Was not incenſed by his ſubtile Mother,
To taunt and ſcorne you thus opprobrioufly?
Glo. No doubt, no doubt: Oh 'tis a perillous Boy,
Bold, quicke, ingenious, forward, capable:

Mr. William Shakespeares Comedies, Histories, & Tragedies. (London, 1632), sig. t2
（明星大学図書館所蔵，F2-1，MR 0121　撮影筆者）

ちなみに manent とは古典ラテン語からの借用語で当時演劇用語として用いられていた manēre (「その場に残る」の意の動詞) の三人称複数現在形である。F1（と F3）に用いられている manet は三人称単数現在形で、複数の登場人物が舞台上に残る演出となっているこの場面には F2（と F4）の方に文法的整合性があると言えよう。[8]

合字 Æ の位置

ファースト・フォリオやセカンド・フォリオを印刷した印刷工房では、合字 Æ の活字サイズを、タイトルの 'JULIUS CÆSAR' 中のほかの活字に比べてひとまわり小さいものにしている。サード・フォリオやフォース・フォリオでは、ほかの活字とおなじ大きさの合字が使われているのと比べるとサイ

8　*OED* を引用しておく。manet: "classical Latin manet, 3rd person singular present indicative of manēre to remain" (*OED online* [https://www.oed.com/view/Entry/244744#eid12460486] accessed 15 Oct. 2021.
manent: "classical Latin manent, 3rd person plural present indicative of manēre to remain" (*OED online* [https://www.oed.com/view/Entry/244743#eid12460402] accessed 15 Oct. 2021.

ズの違いが明白である。（画像 4，5，6 を参照）

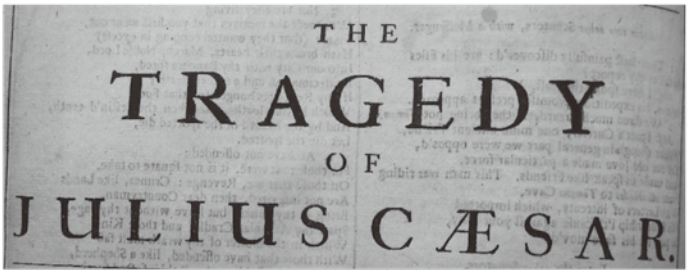
画像 4　ファースト・フォリオの *Julius Caesar* タイトル

Mr. William Shakespeares Comedies, Histories, & Tragedies. (London, 1623), sig. kk1
（明星大学図書館所蔵，F1-6，MR 1935　撮影筆者）

画像 5　サード・フォリオの *Julius Caesar* タイトル

Mr. William Shakespeares Comedies, Histories, & Tragedies. (London, 1664),
sig. Mmm5（明星大学図書館所蔵，F3-6，MR0788　撮影筆者）

画像 6　フォース・フォリオの *Julius Caesar* タイトル



Mr. William Shakespeares Comedies, Histories, & Tragedies. (London, 1685),
sig. Bbb4v（明星大学図書館所蔵，F4-20，MR3573　撮影筆者）

ちょうどよいサイズが工房になかったためか、あるいは、高さがそろう大きなサイズは幅がほかの文字にくらべて広くなってしまうので仕上がりを見映えの点で嫌ったためか、など、合字 Æ に小さいサイズの活字を選んだ理由

は想像するほかないが、その行のほかの活字と幅は一致しても高さが低いので、上下どの位置に固定するかスペースを込め物で調整する必要があった可能性がある。セカンド・フォリオの印刷では、その調整に少々問題があったのであろう。明星大学図書館所蔵の26冊のセカンド・フォリオに見られるサンプルから考察を試みる。

26のサンプルを観察した結果、Æの位置が高い順にTYPE AからTYPE Eに分類できることがわかった。以下、画像7から画像11に各タイプのサンプル（いずれもSig. ll5より）を26冊中の出現コピー数とともに載せておく。

画像7　TYPE A　（5コピー）

Mr. William Shakespeares Comedies, Histories, & Tragedies. (London, 1632), sig. ll5
（明星大学図書館所蔵，F2- 4，MR 0887　撮影筆者）

画像8　TYPE B　（3コピー）

Mr. William Shakespeares Comedies, Histories, & Tragedies. (London, 1632), sig. ll5
（明星大学図書館所蔵，F2-7，MR0792　撮影筆者）

画像9　TYPE C　（5コピー）

Mr. William Shakespeares Comedies, Histories, & Tragedies. (London, 1632), sig. ll5
（明星大学図書館所蔵，F2-13，MR1917　撮影筆者）

画像 10　TYPE D　（1 コピー）

Mr. William Shakespeares Comedies, Histories, & Tragedies. (London, 1632), sig. ll5
（明星大学図書館所蔵，F2-20，MR3485　撮影筆者）

画像 11　TYPE E　（12 コピー）

Mr. William Shakespeares Comedies, Histories, & Tragedies. (London, 1632), sig. ll5
（明星大学図書館所蔵，F2-25，MR3833　撮影筆者）

セカンド・フォリオの印刷工房が理想としたÆの位置はどのタイプであったのだろうか。活字の位置もプレス・ヴァリアントのひとつであることに着目し、すでに見てきた‘*Manent*’の位置をめぐるプレス・ヴァリアントのデータと重ねてみたのが表 1 である。

表 1

F2 番号	MR 番号	① *R3* Sig. t2 ‘*Manent*’の位置 corrected / uncorrected	② *JC* タイトルの合字 Æの位置 TYPE A ~ E
F2-01	0121	corrected	TYPE E
F2-02	0660	corrected	TYPE C
F2-03	0668	uncorrected	TYPE E
F2-04	0887	corrected	TYPE A
F2-05	0782	corrected	TYPE A
F2-06	0783	uncorrected	TYPE B
F2-07	0792	corrected	TYPE B
F2-08	0906	uncorrected	TYPE E
F2-09	0921	uncorrected	TYPE E
F2-10	0922	uncorrected	TYPE E
F2-11	1445	corrected	TYPE A
F2-12	1446	corrected	TYPE B

F2-13	1917	corrected	TYPE C
F2-14	1937	corrected	TYPE E
F2-15	1941	corrected	TYPE E
F2-16	1964	corrected	TYPE E
F2-17	3383	uncorrected	TYPE E
F2-18	3232	uncorrected	TYPE E
F2-19	3199	corrected	TYPE C
F2-20	3485	corrected	TYPE D
F2-21	3571	corrected	TYPE A
F2-22	3601	uncorrected	TYPE C
F2-23	3606	uncorrected	TYPE E
F2-24	3854	corrected	TYPE C
F2-25	3833	corrected	TYPE E
F2-26	4355	corrected	TYPE A

印刷工房が合字の位置として是としたのはどのタイプだったのだろうか。それを推測するために修正前後（corrected / uncorrected）の区別が明らかな‘*Manent*’の位置を基準にソートしてみたのが表２である。

表 2

F2 番号	MR 番号	① *R3* Sig. t2 ‘*Manent*’の位置 corrected / uncorrected	② *JC* タイトルの合字 Æ の位置 TYPE A ~ E
F2-01	0121	corrected	TYPE E
F2-02	0660	corrected	TYPE C
F2-04	0887	corrected	TYPE A
F2-05	0782	corrected	TYPE A
F2-07	0792	corrected	TYPE B
F2-11	1445	corrected	TYPE A
F2-12	1446	corrected	TYPE B
F2-13	1917	corrected	TYPE C
F2-14	1937	corrected	TYPE E
F2-15	1941	corrected	TYPE E
F2-16	1964	corrected	TYPE E
F2-19	3199	corrected	TYPE C
F2-20	3485	corrected	TYPE D
F2-21	3571	corrected	TYPE A
F2-24	3854	corrected	TYPE C
F2-25	3833	corrected	TYPE E
F2-26	4355	corrected	TYPE A

F2-03	0668	uncorrected	TYPE E
F2-06	0783	uncorrected	TYPE B
F2-08	0906	uncorrected	TYPE E
F2-09	0921	uncorrected	TYPE E
F2-10	0922	uncorrected	TYPE E
F2-17	3383	uncorrected	TYPE E
F2-18	3232	uncorrected	TYPE E
F2-22	3601	uncorrected	TYPE C
F2-23	3606	uncorrected	TYPE E

まずは、表2からTYPE Aが出現するコピーには‘*Manent*’が未修正というコピーが含まれないということがわかる。そこで、TYPE別にソートしてみると表3のとおりとなる。

表3

F2番号	MR番号	① *R3* Sig. t2 ‘*Manent*’の位置 corrected / uncorrected	② *JC* タイトルの合字 Æの位置 TYPE A ~ E
F2-04	0887	corrected	TYPE A
F2-05	0782	corrected	TYPE A
F2-11	1445	corrected	TYPE A
F2-21	3571	corrected	TYPE A
F2-26	4355	corrected	TYPE A
F2-06	0783	uncorrected	TYPE B
F2-07	0792	corrected	TYPE B
F2-12	1446	corrected	TYPE B
F2-02	0660	corrected	TYPE C
F2-13	1917	corrected	TYPE C
F2-19	3199	corrected	TYPE C
F2-22	3601	uncorrected	TYPE C
F2-24	3854	corrected	TYPE C
F2-20	3485	corrected	TYPE D
F2-01	0121	corrected	TYPE E
F2-03	0668	uncorrected	TYPE E
F2-08	0906	uncorrected	TYPE E
F2-09	0921	uncorrected	TYPE E
F2-10	0922	uncorrected	TYPE E
F2-14	1937	corrected	TYPE E
F2-15	1941	corrected	TYPE E

F2-16	1964	corrected	TYPE E
F2-17	3383	uncorrected	TYPE E
F2-18	3232	uncorrected	TYPE E
F2-23	3606	uncorrected	TYPE E
F2-25	3833	corrected	TYPE E

Dane や Eagan が論じたように、修正前（uncorrected）を含むシートは印刷初期の、したがって、ヒープの上の方により多く、また修正後 (corrected) を含むシートは逆に印刷後期の、したがって、ヒープの下のほうにより多く分布しているはずである。両面とも印刷が終了したヒープは他のシートのヒープとともに、のちに効率よく本に集める作業（gathering）に備えて並べられた。この表の①列で uncorrected となっているシートを含むコピーはそのコピーを構成するどのシートもヒープの上の方に属していた、つまり、刷り工程のはじめのほうに刷られた可能性が高い。②列の合字の場合も①列の '*Manent*' をめぐる修正の場合と同じように、上の方に属していたシートを集めて一冊としたコピーに修正前のものがより多く分布していたと考えられる。

これらの表から、セカンド・フォリオの植字工あるいは印刷工の理想の Æ の位置を割り出すことは、はたしてできるのだろうか。コピーが世界でどれくらい現存しているか、正確な数はまだ明らかになっていないが、各地の図書館でフォリオを調査してきた経験から、230 冊あまり現存するファースト・フォリオよりはやや多くのコピーが現存しているのではないかと想像される。そのなかでの 26 冊という数が、どれほど全体を代表しているかと問われれば、より精度の高いデータを取り出すにはもっと多くの数が必要であると答えざるを得ないのは事実である。とは言え、データ数の限界を承知の上で、このデータにストーリーを語らせるなら、およそ次のようなストーリーになるのではないだろうか。

合字 Æ の位置は組版完成時には植字工が考える理想の位置にセットされていたはずである。初期校正作業が終了し、印刷工が本刷り作業を開始してみると、恐らくは早速、この合字の活字が印刷作業の工程で加わる組版への様々な圧力や影響を受けて上下に浮き沈むという揺れが生じた。沈みの際立つタイプ E の状態になるとそのことに気付いた職人（おそらくは、ここは簡

単な作業で修正が可能と判断した印刷工がみずから）が、先の尖った道具で位置を調整し刷り作業を続けた。しかし、両隣の活字より小さいサイズで、植字工の初期調整がたまたま万全ではなかったのであろう、応急処置後もふたたび沈む傾向となり、その都度同様の処置が繰り返し必要となった。やがて、活字の固定により効果的な処置が施されたのか、あるいはインクのつまりなどの偶然がよい方向に働いたのか、タイプ A の位置かそれに近い位置に落ち着いていった。と、このようなストーリーを、ここまでのデータは語っているのではないかと思われる。

ファースト・フォリオの場合も、画像 4 が示すように、タイプ A の位置が「正しい」位置とされていたと考えられる。少なくとも Rasmussen and West によるプレス・ヴァリアントのリストには、この合字の位置の揺れはリストアップされていない。一番高い位置が本来意図された位置とすれば、セカンド・フォリオの場合、上の込め物はきちんと働いたのに対し、下の込め物が問題を発生させるような状態であったのであろう。込め物を変更して抜本的に問題を解決することは、組版を束ねるコードを弛める必要がありあらたなエラーを生じさせかねないので、印刷工としてはできれば避けたい処置であったと思われる。Sig. ll5 と同じ紙面に刷られた Sig. ll2v のふたつのページで、その避けたい処置をせざるを得ない修正が発生したかどうかについては、厳密な校合をおこなってみるまでは判断ができない。ただ、セカンド・フォリオの *Julius Caesar* のタイトル部分の印刷には、合字の沈み込みという問題以外にも、スペースをつくる込め物の処理で小さなトラブルが発生していた痕跡が残っている。2 行にまたがって印刷されたタイトルの 1 行目の最後の F の字の下に、画像 12 にあるように、左右逆転した L 字型に込め物の肩か何かが写っているのだ。Æ の位置を気にしていた印刷工はこの印刷汚れには無頓着であったのだろう。この印刷汚れは濃淡に違いはあるものの、合字 Æ の位置に関係なく出現している。

画像 12　セカンド・フォリオ、Julius Caesar タイトル付近の印刷汚れ

Mr. William Shakespeares Comedies, Histories, & Tragedies. (London, 1632), sig. ll5
（明星大学図書館所蔵，F2-1，MR 0121　撮影筆者）

研究の今後の可能性について

セカンド・フォリオのインプリントには 9つの異なるヴァージョンが存在することが Todd の研究により知られている。現存するコピーはすべてが初めから同一コピーに属していたシートを保存しているとは限らない。欠損ページを他のコピーから補って「ページが揃った完全なコピー」に仕立てて再製本するということも 400年の間には行われた可能性がほぼどのコピーにもあるからである。とは言え、本稿で注目した 2つのプレス・ヴァリアントの分布にインプリントによる差異があるのかどうかの解明を試みてみたい。複数の書籍販売ルートに製品（製本前の仮綴じ本）を分配する具体的な方法が見えてくるかもしれない。

参考文献

Black, Matthew W. and Matthias A. Shaaber. *Shakespeare's Seventeenth-Century Editors, 1623-1685*. New York: Modern Language Association of America, 1937.

ブレイニー、ピーター・W・M 著、五十嵐博久監訳『シェイクスピアのファースト・フォリオ―偶像となった書物の誕生と遍歴』水声社、2020.

Dane, Joseph A. "Perfect Order and Perfected Order: The Evidence from Press-Variants of Early Seventeenth-Century Quartos", *PBSA* 90:3 (September 1996): 272-320.

Davis, Herbert and Harry Carter, eds. *Mechanick Exercises on the Whole Art of Printing*. 2nd Edition, Oxford UP, 1962, reprinted by Dover Publications, 1978.

Egan, Gabriel. *The Struggle for Shakespeare's Text: Twentieth-Century Editorial Theory and*

Practice. Cambridge UP, 2010.

Egan, Gabriel. "The Editorial Problem of Press Variants: Q2 *Hamlet* as a Test Case", *PBSA* 106:3 (2012): 311-55.

Hinman, Charlton. *Printing and Proof Reading of the First Folio of Shakespeare*. Oxford: Oxford UP, 1963.

Moxon, Joseph. *Mechanick Exercises. Or, The Doctrine of Handy-Works, Applied to the Art of Printing* (London: Joseph Moxon, 1683). http://rec.nil.ac.jp/hss/2000000000199189/fulltext, accessed 23.9.2021.

Nagase, Mariko. "Traces of Jonsonian Neoclassical Editorial Convention in Shakespeare's Second Folio." *Shakespeare Studies*, The Shakespeare Society of Japan, vol. 56 (2018) pp. 35-60.

Rasmussen, Eric, and Anthony James West. *The Shakespeare First Folios: A Descriptive Catalogue*. Palgrave Macmillan, 2012.

Siemon, James R. ed. *King Richard III* (Arden 3) Arden Shakespeare, 2009.

The Two Noble Kinsmen 1634 (The Malone Society Reprints, Vol. 169) prepared by G.R. Proudfoot and Eric Rasmussen, and checked by H.R. Wouldhuysen, The Malone Society, 2005.

Todd, William B. "The Issues and States of the Second Folio and Milton's Epitaph on Shakespeare". *Studies in Bibliography*, vol. 5, (1952/1953) pp. 61-108. URL: http://www.jstor.com/stable/40345191. accessed 31.8.2020.

山田昭廣「［本を楽しむ］明星大学のシェイクスピア戯曲集初版の謎」『書物學』第 17 巻、勉誠出版、2019 年 9 月、42-56 頁。

Weiss, Adrian. "Casting Compositors, Foul Cases, and Skeletons: Printing in Middleton's Age," *Thomas Middleton and Early Modern Textual Culture: A Companion to The Collected Works*. General editors: Gary Taylor and John Lavagnino, Oxford: Clarendon Press, 2013, 195-225.

画像出典．いずれも明星大学図書館所蔵本．撮影筆者、明星大学図書館より許可を得て掲載。

謝辞

本稿の初期段階の稿を丹念に読み貴重な指摘を多数寄せて下さった本ジャーナルのリーダーの方々と編集委員に感謝申し上げる。ただし、まだエラーが残ったすれば、もちろん、それは筆者の責任に帰されるものである。

研究期間中歴代の明星大学図書館スタッフ、とりわけ、石井美樹氏、半澤博太氏、森田修平氏、および太田潤氏には明星大学所蔵のシェイクスピア・フォリオの調査で大変お世話になってきた。彼らの貴重書保全に関わる専門的知見に基づく貴重書管理業務への献身はもとより、研究への理解とそれに基づく貴重書閲覧調査への惜しみないご支援にこの場を借りて心からなる敬意と感謝をささげるものである。

本稿は科研費共同研究（基盤研究 ©（一般））「シェイクスピア戯曲の二つ折り本（第 1 版から第 4 版まで）の研究」（研究代表者桑山智成京都大学大学院准教授、研究分担者、廣田篤彦京都大学大学院教授、長瀬真理子九州工業大学准教授、住本規子明星大学教授（当時、現名誉教授）、課題番号 18K00370、平成 30 年度～令和 2 年度（令和 3 年度現在コロナ禍で延長中）の助成を受けた研究の成果の一部である。メンバー各氏から受けた支援、研究上の刺激に対しても感謝申し上げる次第である。